

郷里を想い父母を偲ぶ

名古屋市長

大坪満男（三和区弘沢出身）

ふるさと、何と心にしみ、こころ良い言葉だろうと思う。郷里を遠くはなれて暮す者だけに味わえ、与えられる特権だと思う。しかも、その郷里には都会の雑踏ではなく清らかな川と山がある。そして暖かい人情がある。そんな郷里がある私は幸せである。

小生、まもなく古希を迎えようとしている（昭和十二年生まれ）。十五歳で郷里をあとにして五十五年、良きにつけ悪きにつけ、常に想うのは十五年しか過ぎなかつたが越後上越三和である。

なぜなのだろうと自問自答をしてみる。五十年前にくらべ幹線道路が変わったくらいで景観もほとんど変わっていない。清らかな川があり山があつて、父母が眠り、姉兄がいてくれる。こんなにすばらしい郷里がある私は幸福者だと思う。年に一度は父母と先祖のお墓参りに帰郷する

が、高田駅に降り立つとなぜかほっとして心がなごむ。また今年も元気に帰郷できたことに感謝しながら…。

今年も八月二十五日から三日間帰郷した。今回は六人いる孫の中から年の小さい順に三人の孫を連れて行った（孫は上から男子二十一歳、男子十八歳、男子十四歳、男子十二歳、女子十一歳、男子九歳）。どうしても自分を育ててくれた郷里を知ってほしくて…。

私の思っていた通り、おさない孫達三人もわずか三日間ではあつたが、三和弘沢の空のおおさと山のみどりと川の清らかさと人の心の温かさを満喫し、大満足して心に刻んでくれた事と思う。この子たちが、大きくなつても上越三和のことを思い出してくれることを信じている。「おまんがいて「おまんた」が「いる」から、いつ帰郷しても、また帰郷できない

ときでも三和弘沢は私の心と人生の郷里である。

私が物心ついた頃には、父は出稼ぎでほとんど家にはいなかった。姉、姉、兄、私、妹の五人の兄弟だが、私が生まれた時も、父は満州今の中国に出稼ぎに行っていた。「母」、「男子生まれた。名前は」と電報を打つ。父から「満男にせよ」との電報。父は、自分が満州にいたので私を満男としたと、のちに母から聞かされた。

私どもの父母は、そんな家庭だったので大変苦労の多い人生だった事を母に良く聞かされた。しつけにはかなり厳しい父母だったが、併せて深い愛をもつて私どもを育てはぐんでくれた。そうした父母がいてくれたからこそ、今日の私たちがあつたと思う。そんな父母の喜ぶ笑顔が見たくて、頑張れたと思う。そして、あの名曲「ふるさと」を幾度となく口ずさんだことか。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」。郷里と、今は亡き父母と、その父母の晩年を見守ってくれた姉兄たち

に心より感謝。

